

第175回山口西田読書会（2018年6月9日）

前回（第174回、2018年5月26日）のprotocols

前半 中村さんの報告

1. 前回の哲学的な問い

- ・深い悲しみは無の境地や悟りに達しない限り克服できないのか。
- ・「今」に集中することで深い悲しみを超えることができるのか。

○『国文学史講和』の序（1907）末尾を参照

- ・後悔の念は自己を過信するから生じるものであり、己を捨て、絶対的な力に帰依すれば、後悔の念は懺悔の念に変わる。

○議論要約

・記憶というのは思い出すタイミングによって相対的な立ち位置、解釈や、自分にとっての意味合いなどが変化するものである。時間の経過とともに悲しみは神話化、すなわち「純粹に悲しさを想起させる経験」から、その悲しい出来事の人生における意味などを考える中で、「象徴的な存在」へと昇華される。その段階においては、悲しみはある程度緩和されているのではないだろうか。（滝沢）

・深い悲しみは、そう簡単には克服できない。「悲しみは自分のエゴだ」的発想を持ち、自分以外の存在に「奉仕の心」を向けるようになったことで、悲しみを乗り越えた経験がある。（桑原さん）

・時間が薬になる。伝統的に故人の死後49日後に法要を行ってきたのは、それくらいの時間をおけば肉体も精神も落ち着いてくるという昔の人の経験の蓄積なのでは？（岡田さん）

2. 後半 テキスト「直観と意志」38頁1行目～40頁11行目

・芸術的直観は、「働くこと」と「見ること」が同一な稀有な存在である。通常、行動しようとする外外界の影響を受けるが、芸術的創造作用においては、内面的なものを直接的に発露できる。

・文中において、「知る我」と「働く我」の関係性はパラドックスを起しているように読み取れるが、これをどう解釈すれば良いのだろうか？ 「包む」という表現が出てくるが、ここではどういう関係性を表す表現なのだろうか。（次回）

哲学的問い

・考え事をしているとき、意識上では考えていなくても、風呂に入っているとき、寝る直前などに、突然、解決策が思いつくことがある。それは、無意識下での思考の存在を担保

2018年6月8日

するものであろう。哲学において、無意識下での思考の存在はどう位置づければいいのか。